

# 子規會誌

子規の写生

松尾靖秋……………一

子規と東洋城

弘田義定……………六

書簡より見たる飄亭と霽月

足立修平……………一一

子規と香取秀真

山上次郎……………一九

—塑像と篆刻—

子規の悟りと死生観(4)

越智通敏……………二八

青木月斗のこと

弘田義定……………三〇

一一号

昭和五六年  
一〇月

## 例会 記 録

### 六月例会（第四六〇回）

昭和五十六年六月十九日（金） 正宗寺庫裡

出席四十二名

浦屋薫幹事司会により開会。会長あいさつのあと、

講演 子規と東洋城 顧問 弘田義定

終わって役員会を行い、本日発行の「子規歳時」

（越智二良会長著、風戸始幹事写真）の頒布などについて

協議。

### 七月例会（第四六一回）

昭和五十六年七月十九日（日） 正宗寺庫裡

出席四十名。

浦屋薫幹事司会により開会。会長あいさつのあと

講演 五百木飄亭と村上零月 幹事 足立修平

講演は、零月にあてた飄亭の書翰を中心に両者の交友と影響について。

終わって役員会を開き、本会に対し松山市の補助金が支給されるようになったことを報告、関連して本年度予算の更正について話し合う。

### 八月例会（第四六二回）

昭和五十六年八月十五日（水） 正宗寺庫裡

出席四十九名

浦屋薫幹事司会により開会。越智二良会長あいさつの

あと、

講演 子規と秀真 会員 山上次郎

終わって役員会を開き、九月例会における子規忌法要ならびに講演について協議。

# 子規の写生

松尾靖秋

明治三十一年二月から三月にかけて、子規は新聞「日本」紙上に「歌よみに与ふる書」を連載したが、これはいうまでもなく彼のなした和歌革新の叫びであり、従来の和歌がようやくにしてマンネリズムに陥ろうとしたので、その月並化からこれを救い、その旧弊を打破しようとしたものに他ならなかった。しかし、もしわれわれがこれまでの和歌の変遷のあとをたどってみると、そこには何か必然性のようなものがあることを感じさせる。万葉以来の和歌の伝統は、あるときは集団を主とした歌風として、あるときは極めて個性的な色彩の豊かな歌風として、またあるときはより内容的な深化へと向かうというように、さまざまな姿に形成されていったのであったが、そのような歴史的な展開の必然的な要請として子規の存在があったようにも思われるのである。

かくて彼がその方法として取上げたものが、周知のように写生という方法であった。しかし、写生についての彼の見解は「俳諧大要」や「叙事文」、「病牀六尺」などに見られるが、彼はこれについて論理的な思考によって押し進めようとしたのでは

なく、一つの試論として世人に訴えようとしたものであらうと考えられる。例えば次のようにいう。

実際に有のままを写すを仮に写実といふ。又写生ともいふ。

写生は画家の語を借りたるなり。又は虚叙といふに對して実叙ともいふべきか。更に詳にいへば虚叙は抽象的叙述といふべく、

実叙は具象的叙述といひて可ならむ。要するに虚叙(抽象的)は人の理性に訴ふる事多く、実叙(具象的)は殆ど全く人の感情に訴ふる者なり。虚叙は地図の如く、実叙は絵画の如し(叙事文)これを見ても、彼のいうところの写生とは写実と同義語であると解せられるが、要するに、文章表現の手段として絵画的な手法を取り入れようとしたものであったと解せられる。そしてそれは、そのころの時代的な背景を無視することはできないと思われる。即ち、まず第一に取り上げねばならないのは、明治十一年に來日して、東大で哲学と経済学を講じ、かたわら日本美術の研究に力を尽くしたアーネスト・フェノロサであらう。

彼は門下生の岡倉天心と美術学校を創設するなど、日本画の復興やわが国の美術行政に力を尽くした人物であるが、明治二十

年代の学校教育における図画の指導方法は、フェノロサの指導に負うところが大きかったと思われる。しかも、それは写生という方法であった。徳富蘆花の「自然と人生」には、例えば「自然に対する五分時」に見られるように、極めて見事に自然の美をとらえたものがあり、また漱石の「吾輩は猫である」の一節には、

画をかくなら何でも自然其物を写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獣あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこうと思ふならちと写生をしたら。

とアンドレア・デル・サルトの言葉を引いている。こうしたことを見ると、明治の二十年代には既に自然を写すという意味での写生ということが一般に試みられていたようである。しかも子規はみずから画を得意とし、友人には後に有名になった画家中村不折がいた。不折とは明治二十年頃に知りあったようであるが、時代の趨勢に鋭敏であった子規が、写生ということにいち早く注目したのは故のないことではない。また子規は、

草花の一枝を枕元に置いて、これを正直に写生していると、造化の秘密が段々分って来るような気がする。(病牀六尺)

ともいっている。彼は写実に徹することによって、そこに真なる世界を発見しようとしたものであって、これはのちに、日本の文壇を風靡した自然主義の行き方を起点にしたものである。

即ち、明治三十四、五年から澎湃として起こってきた自然主義

は、既にこれを受け入れる社会的背景があったということにもなるであろう。歴史というものはそういうものである。

子規のいわゆる蕪村発見も、もちろん彼の写生と無関係ではない。即ち、子規がやはり芭蕉にその高い評価を与えていたのは一般と異なるところはなかったのであるが、俳句分類という大事業を遂行してゆくうちに、芭蕉に比して少しの遜色もないという評価を改めて蕪村に与えるようになったのである。つまり、子規はおのれの写生説の源流を蕪村に発見したのである。しかし、結論的にいえば、それは子規の誤解によるものであったと思う。蕪村は子規の考えたような写生では決してなかった。絵画的・写生的ではあるが、それは決して写生というものではない。

牡丹散って打重なりぬ二三片

黒蟻のあからさまなり白牡丹

というような蕪村の句は、そのままで見ると限り子規の写生と異なるところはない。しかし、蕪村の句が多く幻想であり、観念的な美の追求にその方法があったということからすれば、傍証する方法はないにしても、こうした句もやはり蕪村のファンタジーと考えるほかはあるまい。子規はその点を誤解したものとされる。そして、多大の共鳴を蕪村に感じたものにちがいない。

子規の和歌や俳句について、これを概観すると、その初期と末期との間には、その表現上の進展にさほど顕著なものはない。

しかし、ここに取り上げようとするわずかの作品の中にも、上に述べたような彼の態度は明らかである。

山吹は南垣根に菜の花は東堺に咲きむかひけり  
くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに  
春雨のふる

真砂なす数なき星の其中に吾に向ひて光る星あり

瓶にさす藤の花ぶさみちかければたゞみの上にと

とどかさりけり

いなびかり薄の上を走りけり

鶏頭の十四五本もありぬべし

これらの例をもつても、「二尺伸びたる」といい「十四五本も」と断定するところに、彼の写実的確さが認められるとともに、この表現は彼にとっては絶対のものであった。そして、そこに彼の求めたものは、真実の世界であつたにちがいない。また、彼のこの態度が、彼の作品の全般を通して、陰惨と憂悶とから全くかけはなれた美の世界を打ちたてることができたということにもなるのであろう。五、六年にわたつて子規の送つた闘病生活は、言語に絶するほど悲惨なものであつたやうである。「仰臥漫録」を見ると、

縋帯ハ毎日一度取換ヘル。コレハ律ノ役ナリ。尻ノサキ最モ痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フストラ猶疼痛ヲ感ズル。背部ニモ痛キ箇所ガアル。ソレ故縋帯交換ハ余ニ取ツテモ律ニ取ツテモ毎日ノ一大難事デアル。云々

と記している。殊に晩年に至つては病床に呻吟する日を重ねていたことが知られる。明治二十八年十二月頃の書簡にも、「死はます／＼近づきぬ。文学はやうやく佳境に入りぬ。」と洩らし、「病牀苦痛に堪へずあがきつうめきつ身も世もあらぬ心地なり。」（墨汁一滴）といい、「総ての楽、総ての自由は尽く余の身より奪ひ去られて、僅かに残る一つの楽と一つの自由、即ち飲食の楽と執筆の自由なり。」（同書）「明け易き夜頃をひとり机に向ひてつくづく身の行末、世の変遷を思ふにある時はあるにあらぬ心なやみに泡沫夢幻を観じて、消えんとするともし火挑げあへず静かに眼をふさぐ。」（松蘿玉液）「筆執りては筆をおき、墨すりては墨を投げ、只々惘然として天井をながむることうら淋しく、春雨の句ども思ひつづける。（同書）といっているなど、まことに眼を蔽わしめるほどの生活であつた。これは実に想像を絶するほどの悲惨であつたと思われるが、そのような苦痛に堪えながらも、いささかの感傷に陥ることなく、死に到るまで悠々たる態度を守りつづけることができた、ということ、彼の求めたところが常に真美の世界であり、しかも彼がまことに強靱な精神力の持主であつたということであろう。子規全集全二十余巻、分類併句全集全十余巻という大事業が、三十五年という短い生涯に、しかも病床に呻吟しながらの業であつたということは、驚嘆すべきことにちがいない。それにつけても想起される一つの事実がある。

かなり古いことになるが、一日わたしは田端の子規庵を訪ね

たことがあった。いまこそ人家の密集した中になっているが、子規の住んでいたころには、東京郊外の農村のおもかげのある場所であつたにちがいない。彼の「庭前即景」と題する十首の中に、

汽車の音の走り過ぎたる垣の外の萌ゆる梢に煙うづまく  
百草の萌えいつる庭のかたはらの松の木陰に菜の花咲きぬ  
などがあり、また、

月照す上野の森を見つゝあれば家ゆるかして汽車往き還る  
や、明治三十五年の歌にも、

赤羽根のつゝみに生ふるつく／＼のびにけらしも摘む人  
なしに

赤羽根の汽車行く路のつく／＼し又来む年も往きて摘まな  
む

などがあり、子規庵のたたずまいを想像することができる。この子規庵にある遺愛品の中に、長さはおよそ五十センチもあるうか、一方の端にテニスボールほどの丸いものをしぼりつけた棒があつた。それは手ずれと汚れて黒く光っていた。一体何に用いるものかと留守居の人にきいてみると、それは、病床の子規が執筆のために起き上がったとき、左の腋の下を支える棒であるとのことであつた。そのときの私の驚きは強烈な印象となつていまもあざやかに私の脳裏に刻みこまれてゐる。文学の鬼という言葉があるが、子規こそはまさにその鬼であつた。私は数年前、朝日新聞の友人が結核を患い、その友人は惜しくも亡

くなつたが、長い療養中しばしば病院に見舞つたことがある。結核患者は長い療養生活をするので、病室に仏壇を持ちこんでいる患者があつたり、廊下を歩くと、その壁には患者の作品、和歌や詩などが貼りつけてあつた。それらの作品には、我が身をいとおしむ思いを綴つたものが多く、なるほど長く病床につくと、そのような心境にもなるものであろうか、といささか同情もし、憐れを催したことであつたが、子規には全くそれが無い。それは見事というほかはない。

彼の辞世となる、

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

をみても、ここには彼の淡淡として、死に對してもいささかも逡巡しない、彼の精神の逞しさを察することができる。歌などの創作的活動は、精神が平衡を失つたときに生まれるという。苦悶や、感激や、極度の悲哀に襲われたとき、それが作品として形象される。しかし子規の場合には、そうしたものがむきだしに詠み出されることなく、それを克服したところに彼の世界があつた。彼が自身の病についてよんだ句もかなり見受けられるが、たとへば、

長病の今年も参る雑煮かな

病床の匂ひ袋や浅き春

林檎くふて牡丹の前に死なんかな

しぐるるや藹弱冷えて膳の上  
など、また「病中三吟」の題詠

小夜時雨上野を虚子の来つゝあらん

いくたびも雪の深さをたづねけり

雪の家に寝て居ると思ふばかりにて

というような、平安な心境を物語るものが多い。それは叫喚する  
というような悲惨なものではなく、静謐な、有るがまゝを諦  
視するという姿勢のものである。虚子その他、子規の生前を知  
る人々の言葉によれば、彼の言動にはある時には秋霜烈日の趣  
があつたというが、作品の何処にもそうしたものが観取されな  
いのは何故であろうか。それは彼の徹底した客観的な態度と無  
関係ではあるまい。彼は宗教を信ずるといふような人物ではな  
かつたといわれているが、しかし、ここにはみずからが築きあ  
げた一種の宗教的な境地が存する。

かくして彼の表現態度は、写真の中に真美の世界を具現し、  
さまざまの逆境に打ち克って純粹に客観に徹底しようとするこ  
ろにあるのであって、これがまた、子規の写生の特質でもあ  
るということができよう。

(特別寄稿) (工学院大学教授・早稲田大学講師)

俳文学専攻 宇和島市出身)

# 子規と東洋城

弘田義定

松根東洋城の遺しました業績の一端をとりあげてお話しします。八十七年の生涯を俳諧の道一すじに、これほど純粹に終始した俳人は珍しいと言わねばなりません。とにもかくにも、明治・大正から昭和の俳壇に大きな足跡を印した俳人であります。それにもかかわらず、その後には次々発行されました俳壇史ないし俳句資料などの記録を見ましても、東洋城のこと、また洪柿を中心とした活動については触れるところ極めて少く、黙殺にひとしい扱いをうけております。その理由が奈辺にあるかはよくわかりませぬが、親しい友人の間柄にありました安倍能成が東洋城を評して、『その性格狷介なり』と指摘しておりますようにそんなところがあったようです。

すなわち、東洋城は、容易に人を近付けず、また自らも人に近付かず、まして俳壇などの動勢などは一生かえりみず、全く孤高の存在でありました。明治以後の俳壇史において、虚子・碧梧桐・蛇笏などが華々しく記録されているのに反して、東洋城ないし洪柿の扱いがひやかかであることは、右に述べましたような事情もありましよう。

そのように、洪柿は、「ひとり往く」形の下に、常に俳壇の外側に位置を占めながらも、「ホトトギス」「層雲」につづく古い誌齡を保持、昨年十二月には八〇〇号を迎えました。しかも、全国的に勢力をのばし、特にわが愛媛県下の洪柿を支持する会員は、他派に伍して一、二を競うほど、東洋城追慕の人々の多いのは偉とすべきでありましよう。

東洋城の俳句は、松山中学を出まして一高に入ったころに始まります。かつて松山中学時代の恩師夏目漱石に師事、当時熊本的高等学校にいました漱石に句稿を送り、しばしば通信添削をうけております。その間、漱石の指示もあったものと見えます。根岸の子規庵にも通っております。そして、新聞「日本」の俳壇にも関与、更に虚子・碧梧桐とも交わり、「ホトトギス」の仕事を手伝っております。のちには虚子と不仲の原因を作りました国民新聞の国民俳壇も、虚子に代わって東洋城が選者をしていた時代があります。

そのようなわけで、子規と東洋城の交渉も通り一片のもではなかったように思われますが、子規の指導をうけたというよ

うな言い方はさけて、「自分は漱石の弟子である」と称し、のちには子規に反発する俳論などを発表しております。

東洋城は、大正四年二月に「洪柿」創刊、俳句の道に「芭蕉精神に還れ」の指標を掲げました。これは今から考えますと、子規が蕪村の句を芭蕉以上に評価し、写生の説を唱えたことに對して、東洋城の心に訴える別のものがあつたのでありましよう。つまり、単なる写生ではなしに、より高度な理念を求める手段として、芭蕉俳諧の深奥を探る提唱がなされたように私は理解いたします。

そして、東洋城は清教徒的な姿勢を示すとともに「俳句の道は人間の修養に通ずるもの」であるべきだとして、いわゆる知行一致という大変むずかしい理論を門下に説いて來ました。

「俳句は社交に非ず、慰安の具に非ず、遊樂嬉遊の法でもない。東洋文化の持つ精華の流露発揚、人としての完成のための内部工作即ち修行の道である。」

と述べて、東洋城は周辺の人々にきわめてきびしい教訓を試みているのであります。

毎号の「洪柿」誌上、東洋城は哲学的な、一度読んだだけでは容易に飲み込めぬたくさんの俳論や実作論を公開、「洪柿」の進むべき性格を明かにしてきました。その中で誰にでも一応わかりやすい俳論として、昭和九年三月号の「洪柿」に載せました「心境俳句」の概要を紹介することにいたします。この文章は冒頭に「俳句は心境俳句を以て最上とする」と述べ、凡そ

句を作ろうと志す者は、広く沢山のいろいろのこを見聞し知得し、色々の事物の世界を自分に取り入れておく、自分といふものをこしらえておく、自分に対する一切の態度を作っておく、先ず人は人をみずから作ることが肝要であり、そこに修行の問題が起ってくる。つまり平生心を養うことが第一である、としております。

芭蕉の試みましたみちのくの旅も、単なる物見遊山ではなく、旅の苦勞を体験して心魂を鍛えたのであると東洋城は「奥の細道」の持つ意義を説いております。人は苦勞を積みあげることによつて己れを作り、真人に近づける、それには「信行」によつて句を作ること、行の始めは信なり、「先ず信を起されよ」とも言っているのですが、これをもっとわかりやすくするため、ハコベの一例をあげて心境俳句の何であるかを示唆しております。

自分は部屋の中に火鉢を抱えている。障子ガラスの戸をへだてて、庭の残雪の間にハコベの萌えている緑のいろが見える。その程度の観察は誰にでもできる。真にハコベの緑を見ようと思えば、先づ障子ガラスの戸を開けるのである。そして庭におりる、ハコベの傍に近よつてゆく。しかしそれだけでもいい。ハコベの一本を抜いて、その根についている土の工合をみる。そのうえで抜いたハコベを再び元の土に返してやる。これだけのこまかな観察を重ねるときに、ハコベの形だけではなく、土の中にかすかに息づいているハコベの生態が見るものの心を

うつであらう。ここからハコベを俳句として作る衝動が起つてくる。そうして自己の心とハコベの縁が一体に融合した末に心境俳句が生れる。と実に丁寧な俳句立言をくり返しているのである。

この他にも多くの俳句理論を遺しておりますけれども、右のハコベを例にあげた心境俳句論が、東洋城俳句、また波柿俳句の性格を如実に顕示した代表的な文章であると注目してもよからうと考えます。私はこの心境俳句論を読みまして、終生を写実の精神につらぬいた子規の場合に比べ、句風の上には若干の相違こそあれ、句を作る根本的な心構えとして、理想とするところが、庶幾するところの目標は子規・東洋城ともに相通するものがあつたように理解いたします。それは、子規の徹底主義、極ぼし一個を嘔むにしても、種子の中の核まで味うべきだと述べ、一つの物ごとを捉えるにも、徹底した眼で奥深くまで凝視することを怠らず、短歌の面で申せば、「松の葉の露」一連の作品に見るごとく、執拗なまでに松の葉よりこぼれる白露を丹念に把握しております。これなどは東洋城のハコベ論に共通するものがあるかと思ひます。

このへんで、東洋城の作品を挙げてみることにいたします。それも、多くの人にあまり知られていない初期の句であります。

大正二年（三十六歳）

久万の雪石鏑の雪や菜畑に日

頻る雪崖も三々戸もなかりけり

大正五年（三十九歳）

温泉の町のさらしもぐさや秋の風

梨売や温泉小舎の外に下ろし居る

雲秋や稲の海の果の一青螺 松山城

温泉の楼やかの秋風の嶺に心

温泉を出でて秋風狭き巷かな

船渡れの身を投げて温泉や秋静か

相逢うて語少し秋の句沢山 霽月に

村上霽月とは不思議に性格があつたとみえまして、晩年の霽月は、ホトトギス以上に波柿への投句が多く、いうならば客員のようななかつこうでありました。東洋城も松山を訪れると必ず霽月に声をかけて、相語ることが再三だったようであります。それで、昭和二十年、村上霽月の逝去されました折りは、次の如く追悼の二句を捧げております。

南無俳諧南無鬚髻二月仏かな

春の夜やむかし連句にいまし我

右には、主として道後温泉の句を並べましたが、試みに昭和二十五年頃の句を見きますと、次のような作品も散見されます。

来島瀬戸

全く明けて春残月や渦の上

久米付近

菜の花や堂塔あらぬ寺の門

三内峡谷

曲り入る奥谷どこや花曇

河之内

山屏風春の炬燵に籠るかな

太山寺

鶯に春の軸ある心かな

風 早

奥庭の塀の低さよ蘇枋花

皿ヶ嶺

誰彼や松伐り跡の夏葺

雲涼しく山毛櫛高く古林かな

伊予土佐や山を畳みて夏葺

水草や清水流るる皿の窪

初めにも申しましたように、愛媛県には小学校関係の教員を主にした会員がありましたので、各地の句会に招かれて、県下とあるところの風物を詠んだ句がたくさんあります。東洋城は、句会と呼ぶかわりに俳諧道場と称して、一種の禅味を帯びたきびしいものでありました。そのきびしさがまた東洋城の魅力でもあり、一たび洪柿入って東洋城の鉗鎚をうけましたものは節操かたく、現在に至るも、故人は別といたしまして、会員の變動のないのも一つの特色であると言えましょう。

「洪柿」そのものも、俳壇の埒外に超然として、他に交わることをせず、一面孤独的な傾向もありましたが、同じ漱石門下

のよしみで、小宮豊隆・寺田寅彦・安倍能成・野上豊一郎と言った錚々たる文人を寄稿家のメンバーに擁し、毎号随筆を載せたり、連句を巻いてこれを発表するなど、東洋城自身としてはめぐまれた点もありました。

東洋城は東京に生まれ、父の公務の都合により、栃木、また大洲の小学校をえました。そうした境遇で成長した人でありましたけれど、父権六は司法官、祖父図書は旧宇和島藩の城代家老でありましたし、名門の出ということができるところでしょう。この松根図書と申される人物は当時旧藩主でありました伊達宗紀、同宗城の二代に仕え、幕末維新の混乱期によく藩政を切廻して勤皇の功績をあげております。藩主がそれぞれ名君でもありませんでしたが、幕府に追われていた高野長英（伊藤瑞溪）をかくまい、緒形塾の村田蔵六（後の大村益次郎）を招いて蘭学を藩士の間ひろめたのは、やはり松根図書の肝のすわった決断と采配によるものであります。のちにはシーボルの孫娘まで宇和島によびよせて面倒を見ております。松根図書は、そのような器量人でありましたが、元々は東北の最上家一族、その血脈の中には一種の反骨的要素が流れていたのではないのでしょうか。伊達氏の宇和島移封に際して、家臣も商人も、職人も多くは東北からつれて来ている。いわゆる東北人の不屈な血脈を受けついで来ているように思います。たとえば大津事件の大審院長児島惟謙、藩閥政治打倒を唱えて自由民権運動に没頭した末広鉄腸、初代の大坂商工会議所会頭になりました脱藩浪人土居彦六（の

ちの土居通夫)など、由来宇和島は反骨の士を次々に出してお  
ります。松根図書もまたその一人ということになりますと、こ  
の血をうけた東洋城の場合も、狷介であったと評するよりも、  
反骨の精神が俳句の上に現われたというふうに見ましておか  
しくないようです。それであるからして、狷介の余り誰も近よ  
けないというのではなくて、一たびその門に入った人々には、実  
にあたかい愛情を注いで養成につくしております。

弟子に対し大変きびしい師匠と言われながらも、洪柿を守り  
育てて純粹に生き抜いた東洋城の一生は、意外に愛すべきとこ  
ろの多かつた俳人のように思われるのであります。

(昭和五十六年六月例会講演) (顧問)

### 子規八十回忌

### 献 詠

(五十音順)

予の国に老ても子規忌欠がさる  
二良先生卒寿迎へて子規祀る  
金婚に過去はずかしき子規忌かな  
虚子門に帰依五十年瀬祭忌  
子規したひ八十周忌ねむごころに  
八十路吾れ昭和の友と瀬祭忌  
絶筆の句軸掲げて子規祀る  
病みて知る子規の強さや瀬祭忌  
庭池や渡せる竿の大糸瓜

菊池耕子楼 木戸 一子  
久保 水々 小泉冬耕子  
古茂田文字 重松 虚舟  
鷹野 政子 高橋美千女  
橋 幾志栄

月落ちし海いつまでも眺めるし  
硯屏の色紙を替えて子規祀る  
糸瓜忌や供華に目立たぬ水引草  
八十年かむさびませり瀬祭忌  
柿の艶日にくく増して子規忌かな  
糸瓜忌の糸瓜の水をとりにけり  
糸瓜忌にまみえるために墨をする  
子規の忌の装日々に野も山も  
朗詠の絶句に涙ぐむ子規忌  
子規偲ぶ心一途や明治人  
書画古りて八十回の子規忌かな  
八十年遠きを偲び子規忌日  
瀬祭忌よすがの館天津日に

橋 里風  
田中 極光  
田中 紫蝶  
筒井 梨栄  
平松 好乃  
二神 ヒサ  
光宗 京子  
村上 晓峰  
村上 和鴻  
森 緑葉  
吉井真喜子  
和田 沙子  
渡部 春汀

神にます子規祀る国湯の郷ゆ文化の華の  
弥栄に咲く  
子規会を一度訪ねて講演を聴きたる席に  
伍健さんもぬき  
八十年すぎにし竹の里人のみ歌はいまも  
心にぞ沁む  
年経れば忘らるゝ世にますますに光輝く  
八十年回忌

三味庵誓謙  
谷口 博美  
弘田 義定  
八木 米蔵

(昭和五十六年九月十九日)

# 書簡より見たる飄亭と霽月

足立修平

拜復、飄亭迂人爾來碌々、唯頑健の依然たるを見る。濟洲經  
宮はどうやら曲りなりに方針も相立ち、先日既に同志一行出發、  
來月初めには無事着島するならんと存じ居候。小生は当分中央  
の留守居役にて渡島は來年に御座候も神谷は既に同島に發程い  
たし候。老兄其の後テキサス問題をいかにせられしや、小生は  
相成るべくテキサスより朝鮮あたりに投資せらるゝこと今日の  
日本の立場より申すも好ましく候。一奮發せられては如何。老  
兄果して其の御助力も致すべく候。既に群山其の他にも土地の  
好ましきものあり、外に我事業としてやり度きものも御座候。  
今試にこゝに一万の金を投ずる覚悟なくば朝鮮にては一寸した  
仕事出来不申候。老兄が一の資本家となり、小生等同志中の適  
任者をして一仕事やらされては如何に。小生は十分の責任を以  
て中間に紹介の勞を取り可申候。頓首。

十月廿八日

秋もはやたけて斗牛の光りかな

霽月老兄

飄亭

右は飄亭と霽月の交渉を示す最初の残存資料である。  
五百木飄亭は、すでに知られているように松山出身で、霽月  
より一つ年下の明治三年生まれである。二十二年に上京、常磐  
会寄宿舎に入り、そこで子規と相識り、子規の俳句革新に同調  
して多くの俳句を作ったが、その後は即興吟を折にふれ作る程度  
記をもつて一応熱がさめ、その後は即興吟を折にふれ作る程度  
で、その本業の方に精力を傾けたものようである。それを彼  
は次のように述べている。

日本の記者になつてからの我輩はだんだん仕事忙しくな  
るに従つて文学方面には疎くなつてきた。此の記者生活の間  
に近衛公を知るようになり、それが機縁で對外問題に没頭す  
ることになった。それ迄文学方面に於ては色々正岡に云はれた  
こともあつたが、どうも根が十分に下りない感じがする。對  
外問題といふことに逢着してはじめて自分の行くべき道がは  
つきりわかつたのである。∴對外問題に没頭するようにな  
つてから、我輩は全く文学の埒外に出なければ、後年霞山  
公を失つて浪人するに及びはじめて正岡によつて学び得たと

ころの少ならざるを知った……。 (日本及日本人)

飄亭と霽月との最初の出会ひがいつ、どこであったかは定かではない。霽月は、明治二十四年の夏、家事の都合で廃学、帰郷して俳句を作り始め新旧の俳人と交りをつぶしたが、飄亭はその内の一人で、特に共に松山人といふことがその仲を親密にしたものであらう。霽月の遺した手記に、今人我適の句として新聞「日本」の明治二十七年の抜粋句中に、飄亭の句として

馬一つぬれてゆくなりかきつばた

小坊主の真桑かゝえてすやすやと

というのがあり、二十九年の「小日本」からは、

文山の木像古りぬ山桜

春の夜の人集ひけり浅草寺

大橋のおとろおとろや朧月

漁夫去って大川端の蛙哉

裏店の雑物語小雨ふる

等が好きな句として抜かれている。

前にも述べた通り、飄亭は対外問題に没頭して中途で俳句に遠ざかったといふものの、通信のたびに俳句を寄こす霽月に對して、折にふれ時事の句等を作ってその書簡の末尾に添えている。すなわち、

天下尚ほ取り得で独り蠅を打つ

年まさきに飛竜の氣ありけさの春

明治四一、八

大正元、一

風の吹くだけ吹いて凧ぎにけり  
ことさらの扇つかひや阿諛の輩

大正六、一一、二五

大正八、九、一〇

京都嵐山に遊びて

山は風に雨よぶ青葉若葉哉

急湍や満山の緑ほとばしる

大正九、五、一五

白眼に大鉢かゝえてありにけり

昭和四、三、二

つゝ皆血汐に燃ゆる思ひあり

昭和七、五、一九

また、昭和七年の『鶏頭』には霽月の転和吟と頁を接して多くの句を句日記として載せている。

飄亭自らは作句の意欲は減少したと言っているが、自分の主催する雑誌「日本及日本人」には文学欄も設け、漢詩と共に俳句欄を特設し、寒川風骨を撰者にしており、時には霽月の転和吟や題面吟などにも頁を割いている。そして、その転和吟を評しては

：老兄の転和吟は一ケの翻訳となり、或は連歌興味となり、真の芸術的意義よりしては面白からずと存候故、それよりも霽月句抄として老兄の従来句を精選の上毎号掲載しては如何や。老兄は近來旧作など整理さるゝ由伝聞いたし候が、果して事実なら右の方法にて撰句を順次発表し、自然に一句集の出来る様になされては、右愚案御参考迄に申上候。

転和吟を批判しながら、句集出版をすゝめていた。そのすゝめもあって霽月は政教社から句集を出版することになったが、それについては、飄亭・風骨・阿部里雪等政教社挙げて応援を

してくれて、出版から販布に至るまで世話になった。ことに、

飄亭の忠告にもかかわらず第一回を転和吟集としたが、飄亭は霽月の請うままに次の序文を寄せて句集の巻頭に光彩を添えている。

子規の俳境は蕪村に直面せる時、一段の進展を見た。霽月はむしろ子規に先んじて蕪村に接触した一人である。そうして彼本来の風格は、最も蕪村の格調に共鳴すべき多量の素質を備へて居た。爾來彼は南海僻陬の地に孤棲し、其の山水明媚の間に独り黙々として彼の風格そのまゝなる自然の發育を遂げた。

今や我が俳壇の盛んなる、千紫万紅の観がある。而も党を組み派を立て、互に覇を争ふ。当に落花繚乱の一戦場である。此の紛々の間に無言の行者霽月が突如として其の沈黙を破り、茲に幾十年來の蘊蓄を傾け來つたことは頗る興味ある一対象と云はねばならぬ。あまりに華やかにあまりに騒々しき現代の俳壇に対し、聊か疲労の感ある我等に取り霽月の出現は、其の高逸と幽雅とに於て特に一服の清涼劑である。彼の姿は超然として百花の上にそゞり立つ孤松のそれである。但だ新を競ひ奇を衒ふジャズとダンスの現代的耳目が、此の亭々たる老松の蒼空にをどる飛龍の舞曲と、其の天空に嘯く無弦の琴調とに対し、果して幾何の感興を喚起し来るや。

「鶯の声々心ほとけけり」とは正しく幽谷より出でて喬木に遷れる霽月句集の心境であらうが、今日の俳壇に於て其の鶯の声々に心のほだけ得る者、果して能く幾人ぞや。

鶯に出山の意や動きけん

辛未新春

飄亭

よく霽月を評し得ているものと思はれる。

飄亭が「新聞日本」の記者として近衛霞山公と接触するうち、公に可愛がられるとともに、またその強い影響力を受けて対外問題に没頭するに至つたことは前に述べたが、冒頭に掲げた霽月への手紙にも見られるように、その後の書信も対外問題に絞られるようになってきた。大政治家、大宰相を夢みていた霽月は、その夢破れて南陲に屏居してはいても、天下国家の事に強い関心を持っていたし、忠君愛国をモットーとする国粹主義者であつたがゆえに飄亭の思想に共感を覚え、飄亭もまた霽月に同志的感情を持つていたことが察せられる。

日露戦争に一応の勝利を収めて露国の南進を喰い止め、朝鮮半島の宗主権を握つた日本が、大陸に向かつて發展するとともに大平洋に向かつて進出する気配を示した。それに対して米國が排日運動を始めたので、米國を叩いて日本の実力を示せと明治四十四年の五月七日の書信で主張している。また、翌年には、日本の大陸政策として満洲國を設立し、日本がこれを援助すべしと論じてもいる。大正時代に入ると、その三年五月十二日の書信には、

拜復、帝國の対支政策の実行は、一切の先決問題として先づ近來図に乗れる支人の驕慢侮蔑の心機を一轉せしむるに在り。此を為さずして口舌の間に折衝すれば、所謂百年河清を待つと一般、何事もしてやらるゝが落ちに候。日本は小生年

来主張の如く早晩一大維新时期に入らざれば復興の時なし。内外共に幾多の難局発生するのは不可避当然の勢にて、而かも此の一波毎に日本覚醒の一步を進むるものに候。今度は最軟弱なりし実業家も、多年の経験上トコトン迄やうて呉れと最硬意見にまとも居る程故、当局も相当決行の勇あるべし。

小生は、ともかくこの好機、如何にして例の満蒙解決を演演せんかと、昨今此の一事にのみ焦慮致し居り候。国論の統一などもまだ中々容易にあらず。ともかく此の支那問題を中樞として維新的開展を馴致し来るべく、内外共にこれより益々波瀾の重疊し来るを見ん。

と論じている。つまり、政治家は党利私利を事として国家の大計を誤り、民心は統一を欠きたる状態を以てしては日本の大陸政策は遂行し得ず、やがては日本は滅亡するに至らん。これを救済するには

日本人の精神的覚醒を第一義として時代転換を断行するの他なし。即ち日本式一大革命の下に旧来の其日暮し主義の一切を破棄し、意義あり目的ある一大帝国たらしむるの外無之候。而かも朝野の代表的人物は皆沈滞腐朽せる旧廢物にて一向何の役にも立たず、尚ほ一人の挺身この国難に赴かんとするものなし。從而小生らの党派以外に孤独の立場を有するものが中堅として立つには、第一に軍資の上に最大の困難を感じ、近來は此の苦心の爲めに殆んど不眠症に陥らんとする有様候。併し如何にしても現状の如きものにて推移せば遠か

らずして帝国の一大国難に逢着するは明白の事実候故、所謂人事を尽して天命をまつの大覚悟の下に邁進突貫の覚悟に候。小生は予言す。今日は正に大正維新的決行以外克く国難を拯ふの道なし。而してこの維新は必ず遠からずして到来すと。想ふに此の犠牲となり、陳呉の役目を命せらるゝものは恐らく吾人少数の人々なるべし。

と言って国家を救うために一身を捨ててゐることをも覚悟してゐるような口振りである。そして、押川方義氏を有力なる同志としてこれを国会に送るべく、松山で立候補せしめて自ら選挙応援に馳せ参じ、霽月ら地方有志連にその後援を依頼してゐる。折から勃発した第一次世界大戦も欧米の帝国主義戦争なりと断じ群雄割拠して統一を欠く支那はやがて西欧諸国の餌食となり、日本がただ拱手傍觀しておれば、その大陸政策も挫折を見るのはもちろんのこと、日本自身の衰亡を来たす憂いもあるとし、積極的に此の間に対処すべきであると説き、同じくシベリアを米国の壟断にまかせず、速かに出兵して大陸に対して日本の発言権を確立すべきを説き、当時行われていた財界人等の非出兵論を難じてゐる。すなわち、大正七年七月四日の書信には、

：（前略）且つ国内にても貴兄の意見の如き非出兵論も大分に有之、但し出兵は小生等の率先唱導せる所、貴兄の如き一理あれど結局大局の打算よりすれば此の際大覚悟の下に先づ出兵行動を起し、乗じて以て対支解決迄進入するが唯一の大策に候。現状のまゝにて無為に経過し、戦後の経済に備ふ

などは小生共より見れば全然不可能の事にて、要するに帝国はこの全世界大動乱の中に将来の根柢を開拓し、東洋復活の大基礎を築くに非ざれば到底其後の世界競争に堪ゆるの力なしと確信いたし居候。姑息なる眼前の小利害に打算する経済論者の非出兵論はやがて他日の百損なり。断じて不可と存候。且つ今日の如き人心の萎靡無気力にては所詮駄目の処にて、人心革新の上よりも経世家は一断を下すべき時に候。近来英米地元より帰來せる友人等の談によるも、彼等が真剣なる空気が帝国の寝ぼけたる有様とを対照して真に焦心苦慮に不堪、小生は、結局帝国の一大維新遂行にあらざれば、モハヤ興国の事望むべからずと確信し居るものに候。老兄にも御熟考願度ものと存候。先は右不取敢。

と結んで齋月の覚醒をも望んでゐる。なお同書簡の終わりには、「出兵もようせぬ様なら西伯利亞は結局米国の努力圏内に入るべし。北に米、南に英の揚子江勢力範囲で挾撃せらるゝ暁、日本は到底対支解決など思ひもよらぬ次第なり、対支解決が出来ずに将来列国と競争が出来ると思ふは狂人めいた楽天説なり。」と繰返し力説している。このような重大な時機にありながら、「人心墮落、責任觀念なく、無恥厚顔唯目前をゴマカして自己一身の利益を得れば足るといふが今日上下一般の風なり。政友会は尤もよくこの現代の悪風を代表す。国民の奮起せざるも病骨髄に入りて容易に覚めざるによる」とし、ここに於て「維新時代を創設する工夫如何、これ大問題なり……大正維新は日本

人の復活に帰す。即ち日本及日本人天授の大精神を自覚し、其上に内外政策を根本的に改革し真の王政時代の本体を以て一切を処理するに在り。日米決戦の覚悟は今日直にこれを要す。西園寺らの卑屈なる事なかれ主義は益々国威失墜と共に神州の正気を衰死せしむるに止まる」と言い、日本の興国の理想と、口に平和を唱えながら門戸開放、機会均等を旗印として東洋進出を図る米国の国策とが相容れず、日米戦争を必至と見ているようである。ただし、大正十年一月十九日の手紙には「日米戦争を現閣でやるなどは夢物語に過ぎず候。それをやる位のものなら今日迄の出兵にも今少し意義あるべく候。要は日米戦争のモノになるは先づ内に一維新ありての後にて、然らざる以上、それは唯ワワサに過ぎず候。今少し適切にいへば、小生らの精神が大勢を動かし得たる時がその時に候」と結んでいる。

大正十一年六月二日の書簡には、「時局は追々小生の維新論時代に這入り候。今日の事唯この根本的大手術を以てするに非ざれば到底救国の計なし。小生は本年より十年計画にて根本、对症の両方法を兼行して邁進いたし度、自ら期するものに候。而して根本問題は要するに思想問題の解決に在り、茲に日本本来の大精神を統一するに外ならず、斯くて十年後米国に向つて一大決戦を試み、こゝに初めて日本の運命を決するに在り。自ら省みて微力為すなきを愧づるも、天命を帯して邁進すれば或は十分の一を実現するを得ん、これ小生の祈願也」と陳べている。

昭和二年九月九日の書簡では、助骨等と協力して東亜聯盟義

会を結成し、大陸政策敢行を期するとし、東京で大演説会を開き、全国遊説を計画していることを報じ、昭和三年三月十八日の書簡では、ロシヤを知るためハルビンで「ロシヤ通信」「ロシヤ事情」を出版するが応援を頼むと言ってきた。昭和四年に入ってよりは、数度の通信に、対支問題について、外交問題より軍事問題に移って実力行使すべきことを繰返し力説している。その年の夏休みには墓参かたがた帰松しているが、林泉亭で、霽月の周旋により松山の有志による歓迎晩餐会を催したが、それに対して懇ろに礼を述べて来ている。また、九月には「日本及日本人の経営を井上薫村氏より譲受け、やがては松山に支社を設置する積りであるとして協力を要請して来てもいい。昭和五年に入っても十回を超す書簡が寄せられているが、いずれもロンドン軍縮条約を非難し、米国の平和論は誤魔化しだと断じて条約放棄を力説し、自分の眼の黒い間に対満洲問題を解決し、シベリヤを解決し、日米戦争に及びたいと考えているが、軍資不足で目下悪戦苦闘していると述懐している。

昭和六年九月七日の手紙には「対滿蒙問題に点火され、それを導火線に国内維新が始まり、ひいては対露、対米問題へと延焼してゆくもの」としているが、果たして柳条溝問題が起き、内では五・一五事件が勃発して政党分解への道が開かれ、続発する事件は維新時代へと進展する勢いを示してきた。飄亭は雑誌「日本及日本人」を鹿野氏にまかせ、専ら外で活躍する姿勢

を示した。

昭和七年四月二十三日の手紙では、

拜復、別にお障りもなく大慶に候。当方も無事御安心被下度候。大局の進運は豫想通りにて何ら異変なく、一波一瀾毎に日本の世界進出といふ途順に候。其内必要に迫られ内外共に一大革新に向ふこと間違なし。滿蒙問題は小生らの大陸政策の立場よりして僅かに階段の第一段に足の瓜先がかゝりたりといふだけにて、これから何段も一歩々々踏み上る次第に候。近き処で対露・対米の一勝負がつきつきに参るべく、ここ当分日本は息つけまじく、今に大波が吾人の眼前に山とくづれ来るべく候。今日の日本人の第一の欠点は、自己の天職使命を知らず、寧ろ個人本位、唯物主義の経済本位に墮する所に候。世界綜合の天賦即其の生命なるを知る時に初めて目覚めたる日本民族存在し、初めて吾人生存の意義を認むべく候。それまでにはまだまだ幾多の実物教育を経べく、同時に啓蒙運動も必要なるべく。右迄。

草々

とある。

昭和九年十一月二十一日の手紙では、霽月の持論としていた道德経済論に賛意を表している。すなわち、「拜復、老兄の道德経済立直しは正論にて、元来今日の個人主義的自国本位の利己主義發生せる所謂経済学そのものが根本的の誤りに候。公平なる共存的一如的経済学は日本によりて初めて出産すべき運命を有す。老兄の後生を此の一案件に捧げらるゝは何よりの儀に

候。日本の世界綜合といふ天職遂行上、来年は先づ右に赤露を打って露人を救ひ、左に支那を拾収して支那を救ふといふ二大課題を目標に進展せしめたきものと存居候。」と述べる。

昭和九年一月八日の手紙では、「皇太子御降誕により平素の理想信念に對し、天より更めて一大保証を加えられたる感あり」と喜び、「小生は本年を以て日本の思想的決戦期となし、対露問題を中軸に内外維新の一大楨杆たらしめんと存じ、何とかして一大國論を喚起せん」と決意のほどを述べ、最後に「貴兄の屯田移民策は大賛成に候。宜しく筆を呵して更に呼喚せられ度、雑誌は自由に御利用被下べく候」と、これも癸月の持論である日本の農民の滿洲への屯田移民策に全幅の賛意を表している。昭和十二年二月一日の手紙が飄亭自筆の最後のものとなっているが、

どうやら林内閣が成立しそうに見受けられ候。併しこれも長くは持つまじく、これより軍民間に一喧嘩の幕もあるべく、結局は一大分裂後に一大統一来るの順序に候。今日直に安定勢力の確立は事実問題として不可能事に候。時代は依然として維新過程にあり、中途半端で片付くわけ無之、近衛公の出現は時機未到に候。いかに豪傑ありとも時至らざれば出られまじく候。龍も雲なくば池中に潜むの外なかるべく候。当分は尚逆作用にて漸次覚醒時代に推進せらるべく候。本年は更に波瀾一層なるべしと存居候。先は右迄。

霞山公より托された六尺の孤文磨公こそ維新政府の指導者に

推戴すべき人物としてその時機を窺っていたが、この年の六月遂に近衛内閣成立、折から不治の難病に臥していた飄亭の枕頭を見舞った宰相近衛公をいかなる感慨を以て飄亭は迎えたことであろう。同じ手紙の末に「碧梧桐去月廿日頃より罹病、チブスとなり、本日あたり危篤に陥り候。どうも今度は駄目と心配致居候。」と書き加えられてあるが、何というめぐり合わせであらうか。

飄亭蓋世の感慨をもつても病魔には勝てず、十二年六月十五日には不帰の客となるが、その少し前、活字で左のような挨拶状が各方面に配られ、その一つが癸月にも届けられている。拜啓、全国民待望の近衛内閣の成立を見候に就ては、内外時局重大の秋、来る七月号本誌を以て「革新日本と近衛内閣」号発刊、各方面の権威の御高見特輯仕度、高堂に於せられても、平素の御経験の一端を洩らせられ、同内閣御鞭撻被下度、何卒一文御惠稿の程奉懇願候。

「日本及日本人」 政教社編輯局

敬具

とあるが、癸月を同志同憂の一人と思つてのことであらう。また、政教社の小田氏の代筆で左の如き手紙も送られてきている。拜啓、御健勝奉賀候。近衛内閣出来致候も、五百木先生の病状は甚面白からず。又々小生より御返事申上よとの仰せ御察し願上候。近衛内閣成立当時は、近衛公秘書を通して、五百木先生より種々御注意有之候も意の如くならざること多く、乍併閣僚の大部分は皆近衛公の手足となつて働くことに相成

居候由、兎も角も此の内閣成立せし以上全力を挙げて応援し、  
一步づゝ革新に向つて進まざるを得不得との事に候。公爵は腹  
の底にては対露問題の解決に就き重大決心を有し居られ候由、  
一面内政の問題と同時に一步々々此の方面に向ひ候はんとの  
事、先づ皮切の程度が今の状態かと存候。先は命により御返  
事。」

と述べられている。死の床にありながら近衛公に献策すること  
により、自分の理想、すなわち日本の理想実現を希っているこ  
とがうかがわれる。

近衛内閣により国家総動員法を初め多くの革新的政策が実施  
せられて、それを基盤に日滿支経済ブロック形成のため支那へ  
の進攻が始まり、八紘一宇の理想実現を合い言葉に、飄亭の  
所期した米・英とも戦端を開き、南方への進出をはかった。緒  
戦の赫々たる戦果はその大理想実現の近きを思わせたが、国力  
の差はいかんともするあたわず、漸次後退のやむなきに至り、  
空襲により本国も焦土と化し、一億一心、本土決戦の覚悟も空  
しく無条件降伏、四つの島に押し込められるという屈辱をなめ  
るに至ったが、飄亭は黄泉よりこれを眺めていかなる感慨を抱  
いたであろうか。子も孫もいけにえにして聖戦完遂を期してい  
た霽月も、自分の力を傾けた満洲屯田村がソ連の戦車に蹂躪せ  
られ、軍事占領せられた日本をみつめ、友人西原五洲の追悼に  
託して「憤慨に堪えず行きけん秋悲し」と詠み「承諾必謹文化  
報国秋永はに」ともよんで、文化国家としての日本の再生をこ

いねがっている。

(昭和五十六年七月例会講演) (幹事)

## 投稿 歡迎

本誌は会員の皆様のご協力によって成り立  
っております。内容は、特別寄稿一篇と例会  
講演三篇を中心とするものでありますが、な  
お、場合によっては紙面に余裕を生じますの  
で、左記により短篇をお寄せ下さるよう願  
いします。

- 一 子規ならびに子規をめぐる人々に関す  
るものであること。
- 二 小論・随筆・紀行・詩・短歌・俳句等。
- 三 四〇〇字詰め原稿用紙十枚以内であれ  
ば枚数をとれません。

○注意 短歌・俳句などの創作は必ず前記  
一に該当するものであること。

# 子規と香取秀真

—塑像と篆刻—

山上次郎

子規には天才的なところがあって、大抵のことは何でも立派にやりこなした。俳句はいうまでもなく、短歌・写生文・絵に書、みな超一流で、縦横にその鬼才を発揮したことは誰でも知っている。しかし、彫塑と篆刻に関心を持ってその作品を残したことはあまり知られていない。

子規の作った自分の首の像は現在二つ残っている。一つは東京根岸の子規庵にある粘土づくりのものである。これには花をあしらった土の台がついている。もうひとつは信州松本の胡桃沢友男氏秘蔵のもので、石膏である。制作年はともに明治三十三年である。このころの子規は病気が重くて病牀六尺に呻吟することが多かったが、創作活動は旺盛であった。しかし、重い土をこねることは無理と思われるが、そこは子規、何でも興味をそそると、やり徹さねば承知せぬ性分で、寸暇を割いて作ったのである。この土いじりに重大な影響を与えたのが、香取秀真であった。

秀真は本名秀次郎、明治七年（一八七四）元旦、鶉が関の声をあげる最中千葉県印旛郡佐倉町に生まれた。幼少のころ同町嶺

木麻賀多神社の神官郡司秀綱の養子になり、少年のころから漢文を学び、上京して大八州学校で国語や短歌を学んだ。明治二十七年東京美術学校の鍔金本科を卒業、その後は母校の教授をはじめ、帝室博物館学芸委員、文化財専門審議会委員、帝展委員、帝室技芸員などの要職についた。制作した作品は古典的で品格が高く、近代鍔金界の代表作ともいべきものを数多く残し、内外の展覧会で数多くの賞を受けた。そして、自ら審査長となり、後進の指導に尽くし、鍔金芸術界に大きく寄与した。昭和二十八年文化勲章および文化功労章を受け、その翌二十九年に八十年で歿した人。著書に「日本古鏡図録」「金銅仏写真集」「古京遺文」「日本金工史」「和鏡の話」「随筆ふいご祭」「金工史談」「斑鳩の余光」などがあり、その数は四十をこえる。

また、短歌にも熱心で、根岸短歌会の有力なメンバーとして活躍、子規の死後左千夫らと一緒に「馬酔木」の創刊に努力した。愛媛出身の森田義郎とは特に仲がよかった。のちに寒川胤骨らと「阿迦雲」を創刊した。歌集に「天之真神」「還暦以後」「秀真歌集」などがある。

子規との関係は明治三十二年にはじまる。この年の正月秀真は大八州学校の同級の岡麓や信州の桃沢茂春、鑄金家の山本鹿州らと新年の歌三十二番歌合をして、その判を子規にたのむ。この時子規は懇切に指導したが、その反面、鑄金の話を聞く。何物をも積極的に摂取した子規は、次の歌会の題に「彫刻」「鑄物」を出し、歌を競っただけでなく、それらの話を通じて秀真から新知識を得た。雋敏なる子規は、この面でも独自の意見を抱くようになって、秀真と作品の良し悪しについて論争をす。そして、手紙で「コレハ戦ヲ挑ミオク者ニ候」と所見を堂々とまくしたてた。こういうところに革新者子規の面目が躍如としている。

そのころの鑄金界は、芸術味の乏しい旧来の型にはまった平凡陳腐なものであった。それを子規は、俳句や短歌の世界の追求で悟り得た写生の妙味を生かそうとした。それは秀真に送った歌に明らかである。

青によし奈良の仏もうまけれど写生にますはあらじとぞ思ふ  
天平のひだ鎌倉のひだにあらで写生のひだにもはらよるべし

第一に線の配合其次も又其次も写生／＼なり

これを見ると、子規は、鑄造の原型は写生を基本にすべきである、奈良の大仏もうまく出来ているが、写生にまさるものはない、立体的な彫塑芸術は線の配合が大切で、その微妙さは写生

によらねば出来ないというのである。これに対して秀真はどう酬いたかは不明だが、学校出の若い秀真にとっては意外な面もあったが、うなずくところもあったようだ。たとえば、甲論乙駁のやり取りののち、彼は子規を自宅に迎えて猿曳その他の作品を見せて批評を求めている。その時のことは子規の紀行文、「小石川まで」のなかにくわしく秀真の作品を痛烈辛辣に批判している。その時同座していた鑄金師の原安民が感心して、自分の作品を持ってきて見せたりする。この日は歌人の岡麓も同行、あとで夫人の肉のもてなしをよるこんで食べた。このようにして二人の交遊は次第に深まってゆく。

そのうち、どちらから出たのかは判らぬが、自分の像を作るとおもしろいということになった。三十三年四月ごろ、子規は土で作った自分の首をブリキ罐に入れて秀真のもとへ送った。これを持参したのは母の八重だった。この像は土をこねたままのものゆえとても重い。私は子規庵で持たせてもらったが、鉛かと思うほど重かった。八重は恐らくは人力車で持って行ったのだろう。秀真は珍客にびっくりするが、その首にそえた手紙の封筒に「首桶添」とあったのでさらにびっくりする。中の手紙には、六首の短歌の前に「顔カタゲノ御像御目ニカケ申候、御序ニ御焼キ被下度候」とあった。子規は楽焼のように焼いてほしかったのである。ところが、こういうものは中の土をほじくってうつろにしないと焼けないのである。そこで、秀真は次の歌をもって返事をした。

ホラホラに内クジラネバ焼ケガタシ焼カズヲ有ラン一ツ石膏ニトリテ

この意味は、これは頭の中をほら穴のようにくじらなないと焼けないから石膏にとりましよう、と答えているのである。これを見た子規は次のような歌で返事をしている。

ミチ足レオモタキアタマ穴ヲナミ焼クトモ焼ケジカ焼カズトモヨシ

イカニシテ石膏ニ取ルカ殊ノ外ニ手数カカラバ取ラズトモヨシ

子規は、石膏に取るということが具体的にわからなかったので、焼けなければ仕方がない、手数がかかるのなら石膏に取らなくともよいと返事をした。しかし、秀真はのちに石膏に取った。これが今信州に秘蔵されているものである。私はこれも拝見したが、この箱書きは秀真がしていた。

これがどうして信州にあるのか、この像は子規歿後歌の弟子の伊藤左千夫がもらっていた。それを信州の胡桃沢勘内という俳人であり歌人でもあった人が、左千夫の後援者で歌人だった千葉の蕨桐軒の世話で左千夫の死後譲り受けたものである。

私はこの二つを拝見して非常なよろこびと感動を受けた。あの病身でよくぞ作ったものである。しかも、二つとも造型的におもしろい。何か混沌たるところがあり、芸術的であってさすがと思う。

子規の像を作った人は当時としては原安民と秀真の二人であ

る。安民のは、レリーフで子規庵にある。秀真のは床上の像でこれも子規庵にある。ひいき目というのでなく、これらのうち子規のものが一番優れている。安民ら二人の作は専門家のものでありながら感心しない。とくに秀真の方は子規在世中から問題になった。どこが問題になったかという点、主として眼がいけないというのである。それを言ったのは子規を診ていた医師宮本仲であった。

宮本は骨相学をやっていたのか、子規の眼は鳳眼の眼でとても珍しいよい眼だ、秀真の作った像の眼は鳳眼になっていないと言った。これを聞いた子規は、自分の顔を鏡にうつしながら秀真の像と見比べて、似ていないところを石膏像の上に書きつけた。すなわち、眼のところは「眼裂が狭過に」、額には「額が平か過ぎる」、鼻のところは「ツマリスギル」など、四ヶ所に書いた。私はこれを直接見たが今も墨痕鮮かであった。

ある日秀真が子規をたずねてきた。そして、自分が作った像を見ると、上記のように書き込んであるので秀真はびっくりする。そして、子規はどうしてこれほどのことを知っていたのかいぶかった。子規は「宮本国手が言うに、わしの眼は鳳眼という頼るいい眼だと言った。この像は鳳眼になっていないそうだ」と答えたので、秀真はなるほどと感心する。秀真は専門家だけに何とかこれを直そうと考えるが、そのままになってしまふ。そのうち、年も変って三十五年の春になった。毎年五月になると子規の病状は悪化する。子規はもう自分はだめだとあきらめ

て、その時ちようと牡丹の花を活けていたので、その下に置いてあった石膏の肖像の裏面に、「自題」として、

十一塊牡丹生けたる其下に 規

と書き、さらに「明治三十五年五月十五日」と書きつけた。私はこれを見た時、子規は「病牀六尺」の中でこのことに触れて「若し此俛に眠ったらこれが絶筆である」と書いてあるのを思い出して、それほどにせっぱつまっていたのかと胸迫るものがあった。他方子規の字はいつも立派であると思ったことを忘れない。

さて、再びこれを見た秀真の心中は複雑であった。この床上の像は面目にかけてやり直したいと考えていたのだが、子規が揮毫すると、こわすわけにゆかない。秀真はやむなくこれの子規庵に寄贈した。そして、その心境を次のように書いた。

「鳳眼でなかつたり、眼元がつまり過ぎたり、額が平た過ぎたりした拙作でも、先生の自署のある貴重品であるから永久に子規庵に保存したい。たとへ私の技倆の醜拙を千古に留めても」（「日本及日本人」）

優れた作品を残すことは芸術家の永久の誇りであるが、拙劣なものを遺すことは恥をさらすことである。芸術家の歎びと悲しみはここにあらう。それを、たとへ技倆の醜拙を千古に留めても、自分の作品に子規の署名がある以上残さねばならないというのは悲壯であり崇高である。

ところで、鳳眼の眼というのは、漢和大辞典を見ると、人相学上、あ

る相を備えた眼の名のことで、「波長貴自成影光秀氣又神清、聰明智慧功名遂、超群匠衆異」とある。

子規は学生のころ漱石の易を見て、文学の堂に登って文壇を牛耳る人間になると言ったが、自分自身易を見てもらったかどうかは知らない。しかし、その眼がそれほどのことをあらわしているとするれば、易以上のことである。しかも、それを発見したのは主治医の宮本であったということに驚きを感じる。これはうれしいことである。子規は実によい医師に診てもらったものだ。

これに関連して思い出すことが一つある。私はある時柳原極堂先生をたずねたことがある。この時たまたま某日本画家が子規の肖像を描いて持参していた。先生は感謝しておられたが、作者が帰ったあと、私に、この絵はよく出来ているが眼がいけない。子規の眼はとても温かかった、と言われたことである。極堂は、鳳眼とは言わなかったが、温かかったということは、鳳眼と同じ重さを持った表現といえる。子規に親炙していた人から直接この言葉を聞いた私を幸に思っている。

ところで、子規は自分の像を何個作ったのか、現存しているのは二個だが、子規の書いたものを見ると三つ作ったように思える。これについて秀真は疑問を持っていて二個という考えをしていた。赤木格堂は子規の後継者に目されるほどの傑物で、短歌にも熱心な人であり、のちに代議士にまでなったが、「子規夜話」の中で、子規の像一つは左千夫が貰い、もう一つは自

分が貰った、そしてこれはのちに松根東洋城にやった、と書いている。その像はどの像なのか、また、その後どうなったのか、東洋城と親しかった村上壺天子氏に聞いても知らぬという。もう一人原安民の妻千代子は焼き物をしていて、子規に粘土を持って来た一人だが、彼女は、子規は自作の像が露伴に似ているので露伴にやろうかと話したことを書いてある。このことは格堂も言っていて、そういう話のあったことは事実らしいが、やったかどうかは判らない。しかし、文献をつきつめてゆくと、子規は自像を少くとも三個、多ければ四個作った可能性があると私には考えられる。

このように土をひねることに興味を覚えた子規は、母の像を秀真に作ってもらっている。すなわち、明治三十四年十月九日の「仰臥漫録」に、「ハガキヲ出シテ秀真ニ来テ貰フ、十時過来ル、油土ニテ母ノ顔ヲ作ル」と出ている。子規は厄介をかけた母の像を残して置きたかったのである。その作品はどういうものでどうなったのか、作者の秀真も知らないというし、見たものがないようである。謎の母の像は夢に見るより外ないのか、さびしいものを覚えるが、子規の孝心には心打たれるものがある。

子規がこのように母の像を秀真にたのんだのは、そのころは子規に土をこねる力がなくなっていたということ、もうひとつ秀真の技倆を信じたからであろう。秀真は子規の教えを素直に受け入れて制作にいそしんだので、その当時から立派な作品

を残していて、三十三年にはパリ大博覧会に出品したものが銀賞牌を受けたり、日本の展覧会でも入賞した。しかし、生活は苦しかった。そのころは中村不折や下村為山のような画家もなかなか画では飯が食えなかった。とくに鍍金は人夫を雇わねばならず、材料費がかさむ上、失敗することも多い。その上作品はなかなか売れない。秀真は三十三年の「ホトトギス」に「鍍金日記」を投稿して、鋳物師の苦勞を綿々と訴えている。

秀真は苦心して観音像を作り上げた。これを見た客は見事と感心してほめるが買ってくれない。そこで西国の知人に見せた。この人も結構な出来だと褒めるが買わぬ。困った秀真は観音さんを風呂敷に包んで帰ってくる。たまたま橋の上へ来て考えた。昔自分の書いた扇子を橋から投げて有名になった人がいるが、自分もこの像を川へ投げこもうか、これが唯一の財産だが、これを川へ投げこんだ時、何日かして、これが佃島あたりの漁師の網に引きあげられて、月島のあたりの広場に小さい御堂が出来て納められる。そしてこれが靈験あらたかで御利益があるため、忽ち浅草の観音様みたような御堂に建てかへられる。このとき初めて、台座の銘によって、これが秀真の作だと知れて一夜のうちに立派な家へ這入れるようになるかも知れない。そうすると借金も払えるが、などと楽しい夢を見る。しかし、この観音様は今すぐ金にしなければ食ってゆけないのだ、そんな何年後かわからぬ出来ない相談は考えても仕方ないと、てくてく歩いて帰ってくる。そして、秀真はこのように食うに困るのは

「観音様のばち」だろうかと嘆く。

秀真の心中はこの通りだったろう。ところが、これよりさらに困ったことが起きた。秀真の妻が二人の幼児を残して家出したのである。その妻は子規がたづねた時、子規に

牛を割き葱を煮あつきもてなしをよろこび居ると妻の君に  
言へ

と感謝された奥さんである。子規がその妻君の家出を知ったのは原千代子からであるが、子規をして泣かしたものは、途方に暮れた秀真が、怒りと悲しみのあまり「日本」新聞に投稿した「おに妻」（八首）と「わが子」（八首）と題する歌であった。それは次のようなものであった。

いものしを貧しきものと縁児の和久子を捨てていでし妻は  
や

鬼にかも似たるあが妻うまし子の乳飲兒すてて出でし鬼妻  
吾がおもふ心も知らずうたがひのつれるものかおぞやし

こ妻

次に「わが子」の三首を紹介しよう。

われは父なが母はなし母こひてなくなまさひこ汝が母はなし

牛の乳の乳壺のちちの乏しさに飢ゑてなく子をもる夜かな  
しも

まさきくもあれな正日子天が下ひとりうまし子真名子悲子  
この中に歌いこまれた「まさひこ」「正日子」は秀真の長男

の正彦のことで、子規が小石川緑町に秀真をたづねたとき、

正チャンヲ誰ヤラニ似ルト思ヒハラフアエルガカキシ  
マトンナの耶蘇

と歌った「正チャン」である。この「正ちゃん まさひこ」こそ、のちに東京美術学校鑄造科を卒業、父秀真のあとをつぎ、帝展特選、日本芸術院賞などに輝き、とくに梵鐘作家としては随一で、広島の平和の鐘や比叡山など一〇八個の梵鐘の制作者として著名である。現在日本工芸会の常任理事で、人間国宝の榮譽に浴している正彦氏である。

しかし、このときはまだ生後数ヶ月であったのである。

この歌を見た子規は驚いて次の歌を書き送った。

たらちねの母にわかれて夜泣く子をもるとし聞けば我さへ  
泣かゆ

振ひ立つ時今来たり妻をなみ君ふるひたつ時今来たり

子規はこの時は本当に声をあげて泣いた。十二月二日付けの手紙に「御歌拜見覚えず泣入申候 歌をよんで泣し事今度がはじめてに御座候」と書いた。そして、秀真に対してこの難局をいかにして切り抜けるかについて真心をこめて相談に乗り、あらゆる方策をめぐらす。子規はこういう時極めて具体的であり、卒直である。たとえば家賃が高すぎる、新聞は贅沢品ゆえ金を出すのはやめよ、代わりに自分が送ってやる、という風に生活を切りつめることをすゝめ、仕事の方は、芸術品だけ作ってもすぐ売れないから、生活のためには鉄瓶・薬籠のようなものを

作れ、職業のためにすなわち飯くうために自ら職工になるのは少しも恥かしいことではないとたしなめかつ激励した。しかし、いかなる場合にも職工根性を出してはいかんと大切なことはちやんと釘をさした。

秀真には子規の教えが身にしみて嬉しかったにちがひなく、その後仕事に精魂を傾けたので、明治三十五年五月の東京彫工会第一回青年研究会には「鑄銅古代鹿鈕方四耳香炉」を出品して三等賞になった。

このようにして秀真は危機を乗り切るが、短歌の方も熱心で根岸短歌会にはほとんど欠かすことなく出席しただけでなく、病のいよいよ重くなつた子規のために門人間で看護番を置くようになったとき進んでその一人になった。それは俳人側からは虚子・碧梧桐・羊骨の三人、歌人側からは左千夫に義郎に秀真であつた。このように、秀真は苦しい中を子規のために尽くした。しかし、妻なく幼児二人抱えての生活は荒れがちであつた。酒にまぎらわすこともあり、女を買うこともあり、友人間でいざごさをおこすこともあつた。こういうことを子規は地獄耳で何事をもよく知つて、聞くと容赦なくきびしい忠告状を出す。それは次のようなものであつた。

君は何カイフト 誰ガ告ゲロシタラウナド、イフガソソナク  
ダラスコトハイフモノデナイ 君ノヤッタコトハ大小トナク  
尽ク僕ノ耳ニハイツテキルヨ  
君モモウイ、カゲンニ辛抱シ玉ヘ

アマリタワケタ真似ヲシテハ困ルヨ

僕ガ病氣シテ毎日苦シンデ居ルトコロヲ思フタラ君等モ少シ位辛抱シタマヘ 君独リノ不幸ト思フベカラズ 辛抱ハ後ノタメナリ

八月十九日

秀真兄

女郎買八月ニ一度位ハ善イガソレハ五六十銭デモ足ルヨ

(全集第十九卷、六六〇P)

子規は忠告をよくした。羊骨はよく忠告された一人で、今もその忠告状が子規庵に残っている。とくにこのころは愛弟子への遺言のつもりでよく書いた。たとえば長塚節には、東京へ来て遊ぶだけでなく、新知識を得て農村を指導、一村を興すぐらいでないとだめだ、能なしだ、と叱り、義郎に対しては、若いぐせに晩酌とは生意気だ、すぐやめよという風である。しかし、子規の偉いのは慈愛をこめてるので門人たちへの頂門の一针がよくこたえた。とくに秀真への忠告のなかで、最後に女取買は月に一度位はよい、と、全面禁止しないで許すところに人間味を感じる。妻に去られた若者への思いやりは大きく深い、しかも、それは五、六十銭でも足るよ、と経済的ないまじめをしているところなかなかの心遣いである。

私は思うのに子規から忠告を受けたのは虚子はじめ枚挙にいとまないが、それらの人はみなのに大成した。それは、本人の努力もあるが、子規の教訓・忠告が生涯を貫いて大きいと思

う。秀真の場合も、秀真がのちに鑄金界の代表的な人になり、文化勲賞という、芸術家最高の荣誉を勝ち得たのは子規の訓育が大きいと思う。

もうひとつ、秀真が子規に影響を与えたものに篆刻がある。子規は自作の判を押した葉書に次の歌を書いて出している。

ゑりし字は竹乃里人その文字を彫りたる人は竹の里人

この葉書をもたらした人は安江不空と桃沢茂春だが、その判は竹の根に彫ったものである。もうひとつ不空あての葉書に「子規子姓不詳或曰明治年間人」とあり、それに判を押してあった。それは銅印で「子規子」とあった。単骨は、これは不折の撰字で子規が彫り、秀真が鑄造したものだといっている。この二個とも子規は揮毫した時かなり使っている。なかなかよく出来た判である。惜しいことに二つとも今その所在がわからない。子規は天才的で、篆刻にも興味を持っただけでなく特異なセンスを持っていた。それは幼少のころの師武智五友や大原観山、歌原祢などの影響だが、のちは秀真だったろう。明治三十三年、不折にホトトギスにのせるために「ホトトギス」「第四巻」「第十二号」というのを図案化するようたのんだ時、不折は味のな

いつまらぬものを書いた。子規はそれと同じものをこのように図案にも書いた手紙が残っている。それを見ると現代にも通用する立派なものである。

このように子規は何でも出来る人であった。惜しくも早逝したが、短い人生にもるもの成し遂げた。その中に自作像と

判を残したことはうれしい。

秀真は子規が死んだ時にいち早くかけつけた。そして、棺の上に置く銅板の墓誌の字（鳴雪撰文、三並良書）を彫った。それは次の通りである。

子規 正岡常規之墓

慶応三年九月十七日没

明治三十五年九月十九日没

秀真は、この出来がよかったとみえて、後年拓本にとつておけばよかったのにと嘆いた。

子規歿後の秀真のことは述べることもできないが、秀真の生涯にはつねに子規がつきまといっていたと思う。秀真は子規の恩義を生涯忘れなかった。

秀真は、大正十四年、子規庵保存会が、子規庵の土地建物の購入その他に必要な資金を得るために、全集の刊行にあわせて真蹟頒布（子規の俳句分類原稿一枚五十五円、六十枚を限り頒布）、法隆寺の子規の句碑の拓本（表装、単骨箱書）一枚五円、などときめた時、秀真の銅印も頒布された。その条件は

一寸角以内一字二円、二字五円、三字七円、四字十円で、その申込者と収入は

真蹟六十人、収入二、五三〇円

拓本二九八人、収入一、四九〇円

銅印三〇二人、収入一、五七八円

であった。これを見ると、秀真の銅印希望者の多いのにおどろ

く。そのころすでに秀真の声望が随分高かったのである。こう  
いうことで子規に報いた秀真はさすがにゆかしいと思う。

(追記) 八月廿七日、本稿を書こうと、早朝床に秀真先生の  
歌の書かけたあと、ふとラジオをかけると、NHKの「人  
生読本」の時間で、偶然、香取正彦氏の「音を見る」という  
お話が耳に入った。秀真先生のお話も当然あって、今さらの  
ように縁の不可思議におどろいた。かくして私は三日目の  
話を聞いたあとようやく書き終えることが出来た。本稿は講  
演要旨なので不十分ではあるが、謹んで子規・秀真両先覚の  
御霊前に捧げたい。 合掌。

(昭和五十六年八月例会講演) (会員)

### 松山子規会叢書

新刊

子規歳時 新訂版

越智二良著

二二二P 一、二〇〇円

### 松山子規会叢書

- 第一集 たれゆえ草 越智二良著 青葉図書 二八〇P 一、〇〇〇円
- 第二集 ふるさと歳時記 山本富次郎著 青葉図書 二八一P 一、〇〇〇円
- 第三集 狸のれん 富田狸通著 青葉図書 四〇三P 二、〇〇〇円
- 第四集 歌人森田義郎と子規・飄亭 山上次郎著 古川書房 三〇〇P 一、〇〇〇円
- 第五集 思い出の子規 天岸太郎著 青葉図書 二二〇P 一、〇〇〇円
- 第六集 森田雷死久 鶴村松一編著 岡田印刷 三五六P 二、〇〇〇円
- 第七集 野間叟柳 畠中淳・鶴村松一編著 青葉図書 二四〇P 一、五〇〇円
- 第八集 子規追悼と伊予俳壇 鶴村松一編著 青葉図書 二二二P 一、五〇〇円
- 第九集 愛媛自由律俳句史 鶴村松一編著 青葉図書 一七三P 一、二〇〇円
- 第十集 芝不器男全句集―素月拔選草稿― 塩崎月穂編 白羊社 二八二P 二、〇〇〇円
- 第十一集 正岡子規一人とその表現―長谷川孝士著 三省堂 二五三P 二、八〇〇円

## 子規の悟りと死生観(4)

### 越 智 通 敏

また三十三年十月のホトトギスに発表した「病牀問答」および翌年三月の「病牀俳話」では共に、對話に答える子規を「俳維摩」と称して俳話を試みている(第五卷、四四〇P)。また、三十三年十一月十五日の「病牀読書記」(第十四卷、四六P)には、「維摩経を読む。余仏教を奉ぜず。仏経を読むは仏經斯の如しと見るのみ」とある。もともと宗教的資質の少い子規は、知的関心から維摩経を読んだと言うが、学び取ったものはそれにとどまらなかつたであろう。極堂の語るところによると、明治三十一年に子規を病室に訪ねたとき、「どうしたのかそのときはあのとりさがし屋がすっかり書物などを整頓して布団の上に寝ころんでゐた」(「子規を語る」、別巻三、二五九P)と言っているが、それはちょうど右の俳維摩と言ったときより前、俳無門と言った時期に相当する。これは明かに維摩経の影響によるもので、維摩居士の部屋の空にならって、病室を整頓していたものであろう。病気になって子規の生活態度は一変したというが、ここにもそれが表われているので、自らの部屋を彌祭書屋と称し、自らを彌祭書屋主人と称したことでもわかるとおり、常盤会寄宿舎でも、下宿屋の部屋でも、足のふみ場も

ないほど書物を乱雑に積み上げていた時代のことを知っている極堂には奇異に感ぜられたのである。ちなみに、子規の蔵書目録には、注維摩経・無門関のほかに白隠禪師法話集・普観坐禪儀不能語がある。「普観坐禪儀」は道元のものであるから、その影響があつたことも感ぜられる。子規の文学における時間論が道元の時間論の影響をうけたふしが感ぜられ、それが写生論の根底になることは別稿で述べたとおりで、その人生観とともに興味のあるところである。三十二年十二月十日の「消息」には、禅宗を「東洋的中の東洋的にして消極中の消極に傾き申候」とあつて(第十二卷、三七六P)、一面の見方を示しているが、実際は積極的な生活態度にこれを生かしているように思われる。また、死期の近くなつた六月十九日からの「病牀六尺」は、「如何にして日を暮すべきか。如何にして日を暮すべきか」(十九日)、「誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか、誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか」(二十日)、と連日苦しみを訴えているが、普通人なればこんなとき宗教心も起こりそうなものであるが、あくまでも理性的な子規は、「宗教を信ぜぬ予には宗教は何の役にも立たない。仏教を信ぜぬ者は南無

阿弥陀仏を繰返して日を暮らすことも出来ない」と信仰心のないことを述べている（第十一卷、二八二―四P）。しかし、こんな時いちばん耳に入りやすいのは浄土門の教えである。たまにそんな時、後に真宗の偉僧となった晁鳥敏が、時々子規を見舞っては、念仏の話を中心に、子規に尋ねられるままに仏教の話をしていたことが、七月十三日に訪問した和田不可得（後の高野山管長）に語られている。死期の近い重病人であるのに、話し好きの子規は、不可得と夜のふけるのも忘れて話し、求めに応じて画帖に青色の蠶螂を一匹画き、そのわきへ少し大きく「勇猛心」と書き、下へ小さく「臥病十年かまきりのごとき筆を握りて 子規子」と書き、精神力の強さを示した後、話の終わりに、「愚庵もソー云うて来た、苦しいをりはウメクより外はないと安心するのが悟りだと、愈々苦しくてたまらぬ時には、神も仏も念ずるいとまがないのでな」と語った。（「根岸庵を訪ふ」、別巻二、七四―六P）

ここにも、苦しいときには泣きわめくよりはかはないと安心するのが悟りだと言っているが、このころ、子規は最後の悟りに到達していた。六月二日の「病牀六尺」（第十一卷、二六一P）に、

余は今迄禅宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。

というのがこれである。そのあとに禅の公案風に

因みに問ふ。狗子に仏性有りや。曰、苦。

又問ふ。祖師西來の意は奈何。曰、苦。

又問ふ。……………曰、苦。

と書いているが、狗子仏性も祖師西來意も有名な公案で、それを借りて自らの悟道を「苦」と言つたもので、さきの苦しいときは泣きわめくのが悟りと言つたのと同じ意味である。有るといえば狗子に仏性あり、無いといえば狗子に仏性はない、祖師西來の意もまた無とも有とも言える。すべてはありのままであり、空であるとも色であり、色であるとも空である。こうした仏教の哲理を、子規は病臥の体験から、「如何なる場合にも平気で生きて居る事」と悟つた。このことについては伊藤左千夫の傍証がある。左千夫によると、子規の文が「病牀六尺」で発表されると、子規はこれが「稍得意であつた」らしく、この文の批評が真宗派の雑誌「精神界」に出て好評であつたことを話し、「半解の人間に盲目的の賛詞を云はるゝ位いやな事はないが、又『精神界』などの様に充分にこちらの精神意義を解して居ての賛評は、知己を得た様な心地で嘖しひ」と語つたという（「竹乃里人」）。これから二カ月の間、死に至るまでの子規の生活は、かつて松山の伯父に書き送つた言葉のように、一日生きればそれだけのことをして、鬼神をも泣かしめるものがある。ことに、その間に主にした仕事は、ほとんど頭を枕から離して上げることができないような身でありながら、力のな

右腕に筆を持ち、左手に持った画板の方を動かして素描し、何度も重ねては彩色して果物帖・草花帖・玩具帖と書き進め、写生に徹して、いわば自然に帰入した心境は、まさに偉大であった。

子規は、早くから仏教の根本義を、如来と我と隔つる所なき也と言ひ、我も人も釈迦も阿弥陀も皆これ仏ととらえ、草木国土悉皆成仏の意を理解した。そしてその意を、

糸瓜サへ仏ニナルゾ後ル、ナ  
成仏ヤ夕顔ノ顔ヘチマノ尻

## 青木月斗のこと

青木月斗は昭和二十四年五月十七日、六十九歳で亡くなった。ことしは恰も三十三年忌に相当するので、月斗のことを少し述べることにした。

子規の句に「俳諧の西の奉行や月の秋」というのがある。これは月斗を指したものであるが、西の奉行と形容したところは面白い。月斗は本名青木新護（しんご）大阪の薬種商の家に生れて、元々商人であったが、若い頃から俳句を志して、当初は月鬼と号して正岡子規の指導をうけた。のちにみずから月刊「同人」を起

と詠んだ（「仰臥漫録」、第十一卷、四三一P）。この「糸瓜サへ」の句があることを知れば、その辞世の句三句について、たとえば

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

の解釈も自ら変わらざるを得なくなる。糸瓜も仏になった、子規も仏になった、糸瓜も子規も仏になった。子規は「糸瓜仏」という仏になった。

（昭和五十五年子規会七月例会講演）

（幹事）

## 弘田義定

して主宰者となり、甘美的な抒情の句を作り、湯室月村、岡本圭岳ら多くのすぐれた門下を輩出、大阪では松瀬青々と水落露石と並称されたほどの重い存在となった。

奈良一日寒き仏と梅の花

春暁や線香匂ふ枕上

百合の薔狐の顔に似たるかな

朝顔やよべ焚きすてし花火屑

大風の日を曇らする枯木かな

春愁や草を嘯めば草青く

これらの句は月斗の代表的な作品であるといえよう。

俳歴をくわしく説けば、明治三十四年十月、根岸庵の蕪村忌句会

に出席、大正四年には「ホトトギス」の課題選者、大正五年には

「カラタチ」創刊、大正九年「同人」を創刊して晩年に及んだ。

門下は右に挙げた外に菅裸場（かんらば）花木伏兔、小野圭史ら

がある。菅裸場は当時の古河鉱業の重役、経済的に月斗に協力す  
るところが大きかった。

尚月斗の妹しげ江（のち茂枝）は河東碧梧桐に望まれて、その  
夫人となった女性である。

（昭和五十六年三月 子規会で卓話）

編集の窓

著作

論文

子規さん 松山市立子規記念博物館編 昭

和五六、九 一九二P 一、一〇〇P

への伝播の状況Ⅱ 宮坂敏夫 信州大学  
医療技術短大紀要六ノ一 一九八〇  
子規の四季雑詠と夏季雑詠選 和田茂樹  
「星」 昭和五五、一一

街道をゆく14 司馬遼太郎 朝日新聞社

昭和五六、六 （巻頭に伊予と愛媛――

正岡子規少年時代――の項収録）

ひとびとの聲音上下 司馬遼太郎 中央公

論社 昭和五六、八 （正岡忠三郎・ぬ

やまひろし伝）

俳句の里松山 森元四郎 松山市文化財協

会 昭和五六、三 一〇〇〇P

村上露月 鶴村松一 松山郷土史文学研究

会 一三二P 七〇〇P

子規の書画 山上次郎 二玄社 昭和五六、

六 三八六P 二、〇〇〇P

藤野古白・その生涯 久保田正文 大正大

学大学院研究論集第五号 昭和五六、二

正岡子規 和田克司 「春星」三五巻に連

載 昭和五五

正岡子規の俳句分類日付別項目一瞥下 和

田克司 大阪成蹊女子短大紀要第一七号

昭和五五、三

正岡子規の俳句分類 和田克司 「語文叢

誌」 昭和五六、三

正岡子規と幸田露伴 和田克司 「うぐい

す」 昭和五六、二

上原三川（六）――日本派俳句運動の地方

昭和五六、四

子規選「四季雑詠」「雑詠」 子規と早

稲田文学13 和田茂樹 「星」 昭和五

六、四

月見の句、鶏頭の句 草間時彦 「星」

昭和五六、四

子規の養子に乞われた私 佐伯徹也 「星」

昭和五六、四

正岡子規の足跡 弘田義定 「短歌研究」

昭和五六、四

碧梧桐の散文文学 相馬庸郎 「俳句」

昭和五六、五

雑報

伊予と愛媛(子規の野球) (「街道をゆく」○俳誌「星」五六年四、五月号に、座談会

第十四篇中) 司馬遼太郎 朝日新聞社

子規選「上・中・下の一句を取りて」 子

規と早稲田文学14 和田茂樹 「星」

昭和五六、五

子規選「上下の二句を取りて」「句調を取

りて」 子規と早稲田文学15 和田茂樹

「星」 昭和五六、六

子規選「雑詠(青)」「大」 子規と早稲

田文学16 和田茂樹 「星」 昭和五六、

七

子規選「二」「春季・夏季雑詠」 子規と

早稲田文学17 和田茂樹 「星」 昭和

五六、八

子規と「早稲田文学」 和田茂樹 「星」

昭和五六、九

子規と会津八一 森直太郎 子規博日より

創刊号 松山市立子規記念博物館 昭和

五六、八

○俳誌「杜鵑花」(畠中淳主宰)昭和五六  
年六月号に、対談「子規の叔父加藤拓川」

(1)(三好湧川・畠中淳)が、つづいて同  
(2)(山本富次郎)、同(3)(越智二良)が

掲載された。

○松山市立子規記念博物館では、特別展「

虚子・遍歴の青春展」が九月十二日から  
開催され(一か月間)、それにちなむ記

念講演として、九月二十日、深川正一郎  
「虚子について言っておきたいこと」、

和田茂樹「子規と虚子」が行われた。

○松山市立子規記念博物館から、八月二十  
五日、季刊「子規博日より」創刊号が発

行された。

○九月二十三日、子規記念博物館で「第十  
六回子規顕彰全国俳句大会」が行われ、

香西照雄氏の講演「子規から草田男へ」

があった。なお、この大会は、従来十一  
月二十三日に開催されていたが、今年か  
ら九月開催に変わったものである。

(編集委員 弘田義定・和田茂樹・  
越智通敏)

子規会誌 十一号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 昭和五十六年十月十九日

発行所 松山市末広町正宗寺内

印刷所 青柳堂

松山市東長戸二丁目一ノ三九

豪華本 『熊野山石手寺』 一手販売中

発行 石手寺信徒世話人会・石手寺先達会  
定価 35,000円 予約特価 30,000円

※御希望の方には石手寺加藤住職等の為書付き

水曜店休 (株)紀伊國屋書店松山店

松山市千舟町5丁目 ☎32-0005

## 仏像・肖像・道祖神

### 石彫美術研究所

馬 越 正 八

今治市桜井甲1666-14

☎(0898)-48-1514



新刊 子規歳時 新訂版 子規会叢書12

越智二良著 風戸始写真 221P 1,200円

### 松山子規会叢書

たれゆえ草	越智二良	ふるさと歳時記	山本富次郎
狸のれん	富田狸通	思い出の子規	天岸太郎
野間叟柳	畠中・鶴村	子規追悼と伊予俳壇	鶴村松一
愛媛の自由律俳句史	鶴村松一		

松山市小栗6丁目3-23 青葉図書 ☎(0899)43-1165

あなたも“心のふるさと”を訪ねてみませんか

# 四国八十八ヶ所巡拝

発心した月から一年でおまいりできる

## 日 曜 遍 路



### 伊予鉄道株式会社

〒790 松山市湊町4-4-1

観光課 ☎ (0899) 48-3111

¥ 300